日本古代史ネットワーク
第3回　解明委員会

テーマ　：　弥生時代から古墳時代

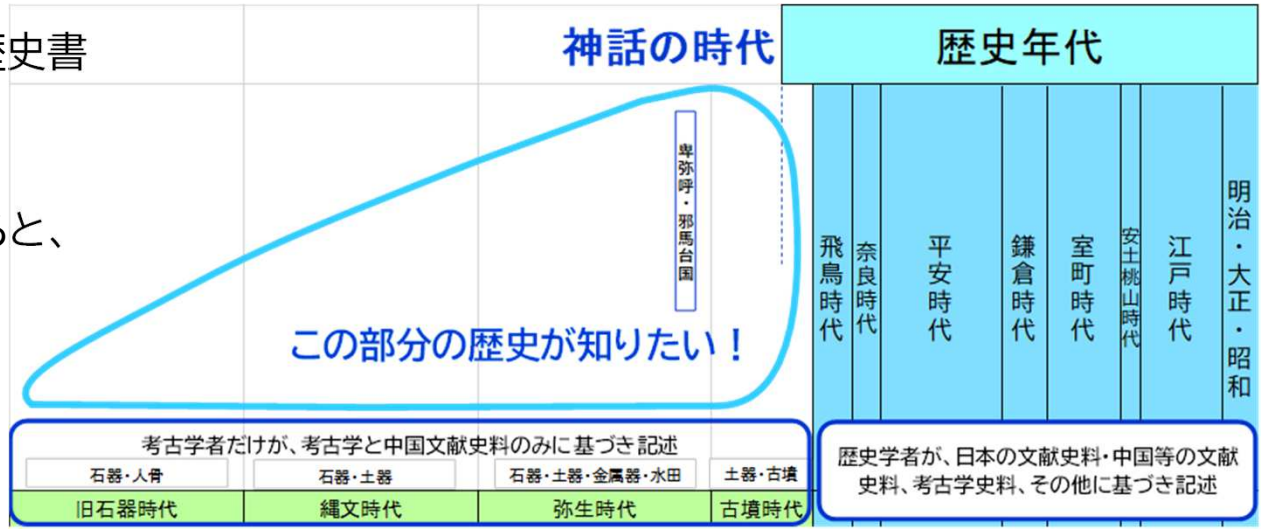
基本レポート

2021年2月27日

丸地　三郎

課題と対応策・方法論

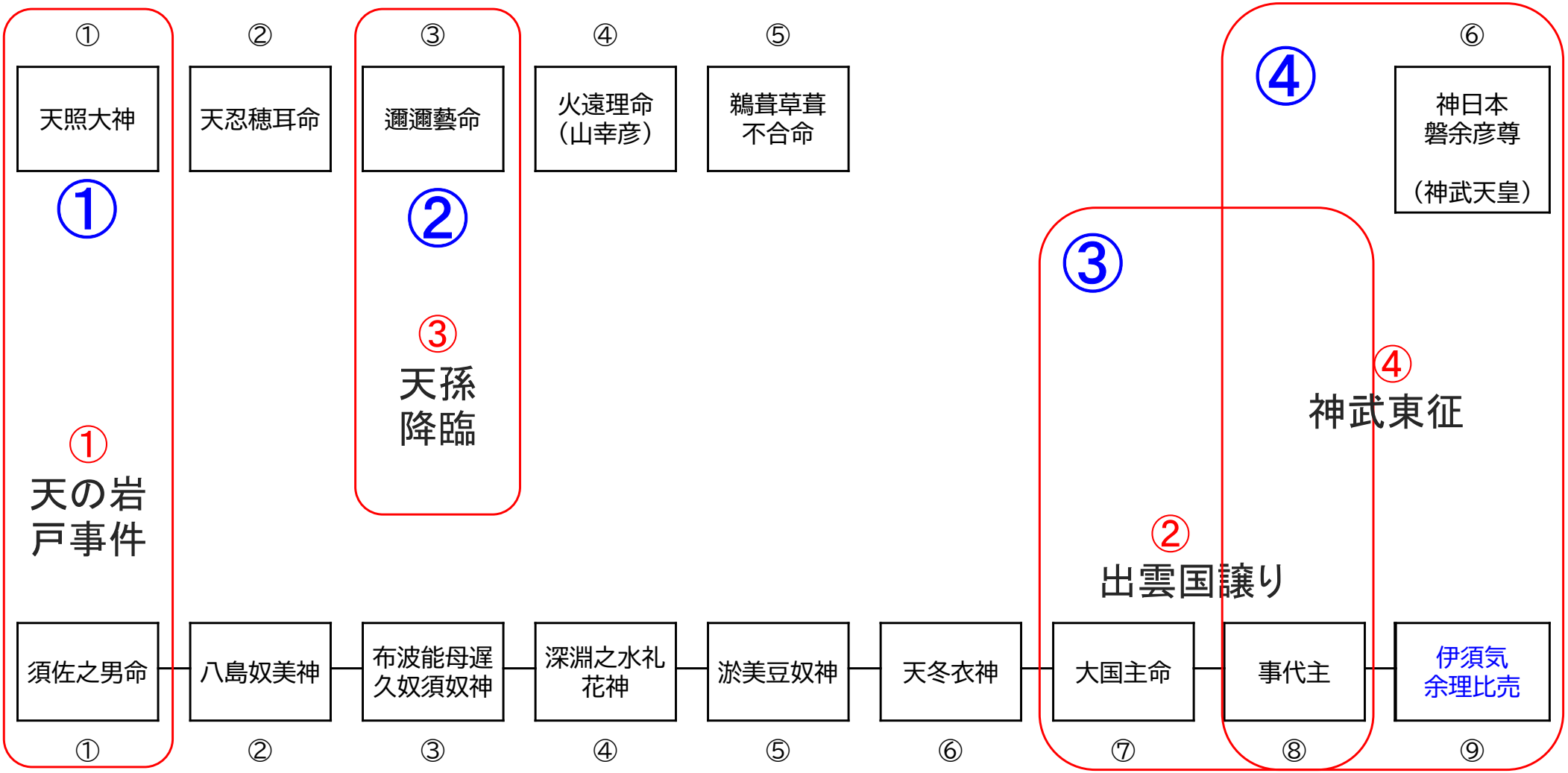
- 終戦後75年間、この時代については、古事記・日本書紀の「神話時代」と呼ばれる時代の記述を、非科学的であるとして全て排除してきた。
  - 考古学者だけが、考古学と中国の歴史書のみに拠って歴史を書いて来た。
- 記紀・風土記の記述が、考古学の成果や、古代地質学等に照らし合わせてみると、事実であったことが明らかになった。
- 歴史学会が取り組まない現状では、私達、アマチュアがやるしか無い。



➢ 文献史料などにより、全く新規に、日本古代史を作り出すのが、「弥生時代から古墳時代」の歴史。
  - 発想も新たに、ゼロから歴史書を作りだす作業となる。
  - 方法論
    - 古事記・日本書紀・風土記などの文献史料を活用する
      - 活用に際しては、史料批判（文献の信ぴょう性を検証）を必ず行い、誤りを排除する。
      - 時間軸と空間の整理を行う。
        - » 歴史家の眼で内容を読み直す。
      - 考古学資料との整合性を取る
    - その他の史料 ： 神社・仏閣の由来・主祭神及び分布　民俗学・民俗学の成果　などを積極的に活用し整合性を取る。
      - 科学的年代測定の活用（但し、非科学的な取り扱いによる誤用は排除）
      - 関連科学（地理学・地質学・農学・生物学・医学・海洋学・人類学など）

古事記・日本書紀等の歴史としての読み方

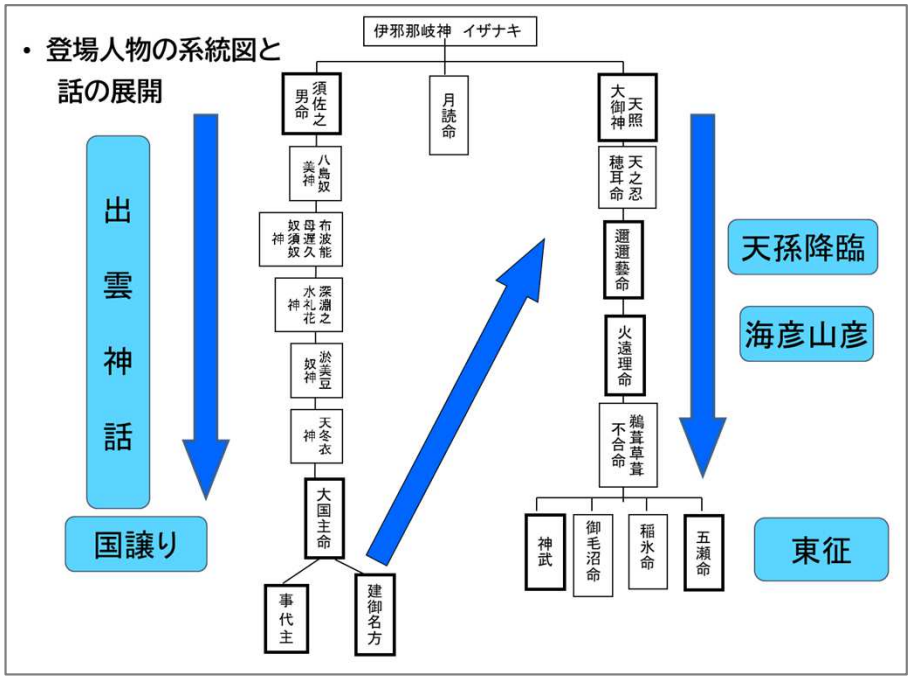
- 事件の当事者と系図の対応を調べることにより、事件の順序が判明。
- 事件の順序は、①天の岩戸事件②天孫降臨③出雲の国譲り④神武東征

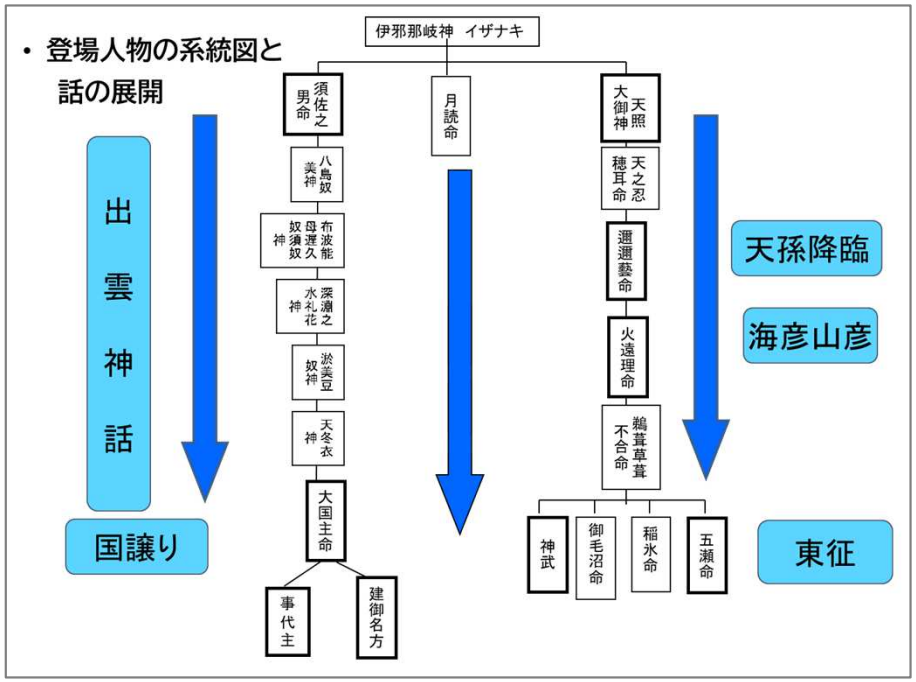


出雲神話と天孫神話の時間軸の理解

- 天照大御神と須佐之男命の争いの後、
- 天の岩戸事件が発生。
- 天照側が状況を逆転し、勝利。
- 須佐之男命を出雲の追放。
- 須佐之男命の出雲建国の神話となる。

  - 天孫族・出雲族の争い激化？
- 天孫降臨（天忍穂耳命未遂）
- 天孫降臨（邇邇藝命挙行）
- 海彦山彦（天孫神話）
  - 天孫族武力強化？
  - 九州地区で戦争？
- 出雲国譲り
- 神武東征
  - 事代主一族繁栄
  - 饒速日一族（物部）繁栄





構築する歴史の事件・出来事の試案 と 検討すべき項目

1. 弥生渡来人　水田稲作の普及　　どんな社会制度文化を持参
   - 縄文人との争い　　縄文人の吸収・対立
   - 日本全土への拡大　　沖縄・北海道では
2. 北九州に成立した王権　　－　漢倭奴王
3. 天孫族と出雲族の対立
   - 出雲の繁栄　中国・四国　近畿　北陸・東海　関東・東北
   - 勾玉・管玉　/ 青銅製祭器（武器型・銅鐸）/ 王墓
4. 天孫降臨
   - 須玖岡本陥落　・ 糸島・三雲地区の繁栄
   - 大戦争；戦争遺跡三期
5. 出雲の国譲り
6. 神武東征・大和朝廷成立
   - ヤマト朝廷の拡充
   - 出雲一族・饒速日（物部）一族の繁栄
   - 天皇家の権力巻き返し作戦
7. 天皇の全国支配確立
   - 崇神天皇　－四道将軍
   - 景行天皇　－九州親征
     - 日本武尊ー九州遠征・東日本遠征
   - 神功皇后　－外交・対外戦略の見直し
     - 蘇我一族の繁栄
8. 古墳時代成立
   - 未検討

- 戦争遺跡
  - 一期
  - 二期
  - 三期
  - 戦傷埋葬者の見かた
- 埋納と副葬
  - 埋納の理由

- 環濠集落
- 高地性集落
- 消失住居

- 青銅器の製作
- 勾玉・管玉の製造・流通

- 箸墓古墳
- 古墳形状

- 年代測定・年代推定
- 中国史書・魏志倭人伝

検討のポイント

- 本来ならば弥生人の渡来から古墳時代成立・繁栄までを、概略でも示し、問題点・課題を示すことが望ましいが、ゼロからのスタートで、それは叶わない。 解明委員会の中で、構築すべき事件・出来事を上げ、検討して行くことが必要と考える。
- 留意すべき点・検討すべき点を掲げる。 又、弥生時代の俯瞰図の一つの参考案として、個人的な試案を示す。

  - 記紀の歴史としての読み方　- 系図と事件の主人公　- 出雲神話と天孫神話の時間軸
  - 史料評価（史料批判）の例
  - 科学的年代論
  - 年代推定　- 天皇の即位年代の粉飾　- 神武即位年代の推定
  - 戦傷人骨・戦争遺跡
  - 埋納の理由
  - 銅鐸・青銅製武器型祭器　- 生産者　- 副葬
  - 勾玉・管玉　- 翡翠（ヒスイ）の加工技術　- 勾玉・管玉の生産・流通
  - 出雲族の拡大範囲　- 埋納青銅器から　-神社の分布から
  - 高地性集落
  - 出雲一族の主役達
  - 弥生時代の俯瞰図試案（弥生・古墳の両時代のものではない）

史料評価（史料批判）の例

- 弥生時代の絶対年代を求めたい処だが、後述するように、困難が存在する。
- 明瞭な絶対年代は中国の史書に記載されたものが有る。
  - 中国の史書に記された絶対年代の例：『後漢書』東夷伝：
    - 建武中元二年（57年）、倭奴国、貢を奉じて朝賀す。光武賜うに印綬を以てす
    - 安帝、永初元年（107年）倭国王帥升等、生口160人を献じ、請見を願う
  - 『魏志』倭人伝：
    - 景初二年（238年）六月、倭女王は大夫、難升米等を遣わして郡に詣り
    - 正始元年（240年）、太守、弓遵は建中校尉、梯儁等を遣わし、詔書、印綬を奉じて倭国に詣り
- 倭国乱（倭国大乱）の時期に関して
  - 日本に戦乱が有った記述として、貴重な記述だが、安易に、この時期を、3世紀後半［桓帝・霊帝の治世の間（146－189年）又は、後漢の霊帝の光和年間（178－184年）］としている例が多い。

    これは、信憑性に欠ける記述。
  - 陳寿の記した三国志の魏志倭人伝にはそのようには記述していない。
  - 陳寿の記した280年代から150年又は350年後に、新たな証拠があるはずのない時期に、推論で記された記述を鵜呑みにしてはいけない。

著 述 年 代	著者	書名		暦年	桓帝・霊帝の間 146-189 43年間	霊帝の光和年間 178-184 6年間
280年代	陳寿	魏志（三国志）		○		
430～440年台	范曄	後漢書			○	
629年	姚思廉	梁書				○
636年	魏徴	随書			○	
659年	李延寿	北史				○

科学的年代測定

- 科学的年代測定の結果が信頼できるものならば、歴史研究は抜本的に変化する。

- **現状は、弥生時代への適用に関しては、信頼できない処に問題がある。悲しい問題**
  - 科学的ならば、科学の基本にもとづいた適用が必須
    - 測定データ・測定試料・判定基準は公開が原則
    - 適用には、科学的な配慮が必須

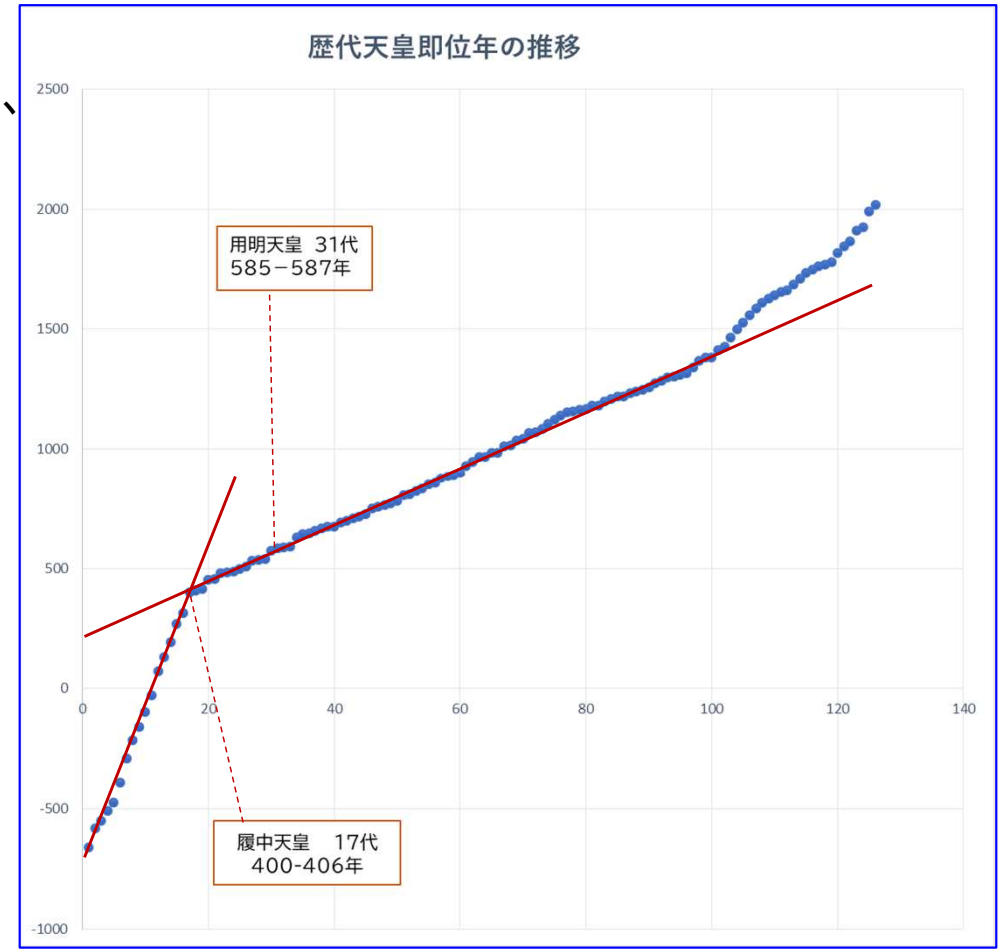
      - 古墳時代の開始時期
        - » 箸墓・纏向型古墳の開始時期の論争
          - 炭素14年代測定法・年輪年代測定　－ 3世紀
          - 考古学者達　－ 4世紀

      - 弥生時代の開始時期
        - » 初期水田稲作　「弥生時代は500年遡る」歴博のキャンペーン
          - 炭素14年代測定法・年輪年代測定
          - 考古学者　従来通り
      - 炭素14年代測定法
          - 較正曲線　最新の較正曲線　Intcal20　の適用　日本の実情に近づけた較正曲線
            - 次世代の較正曲線に期待（水月湖データの完成・報告に期待）
      - 年輪年代測定法
          - 誤りの指摘多数
            - 基礎データが意図的に非公開
            - 公開が必須

天皇の即位年代の粉飾

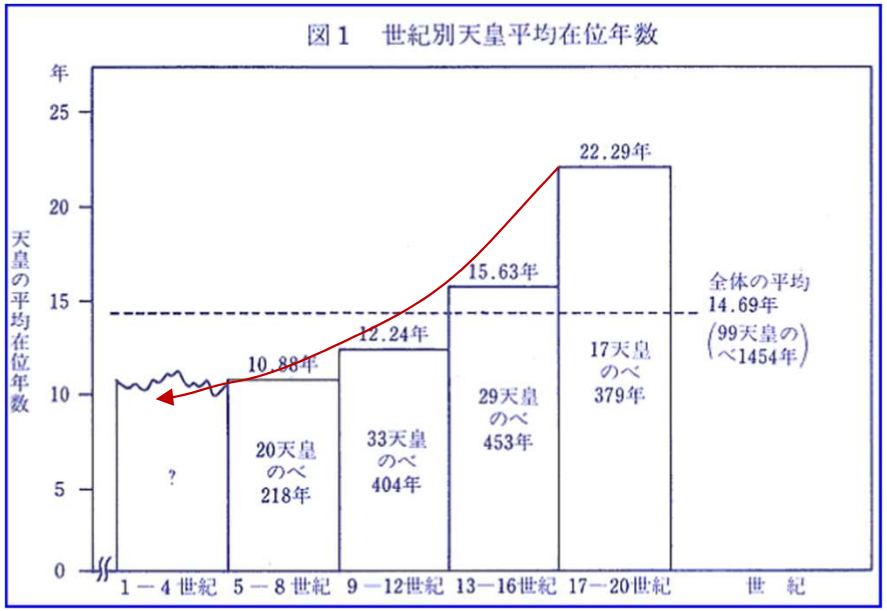
- 古事記・日本書紀の年代は、ある時代より前は、引き延ばされて古く記載されている。神武即位はBC660年は有り得ない。 記紀の年代は粉飾。 これが現代の常識。
- では、いつからの年代が粉飾されているのか？

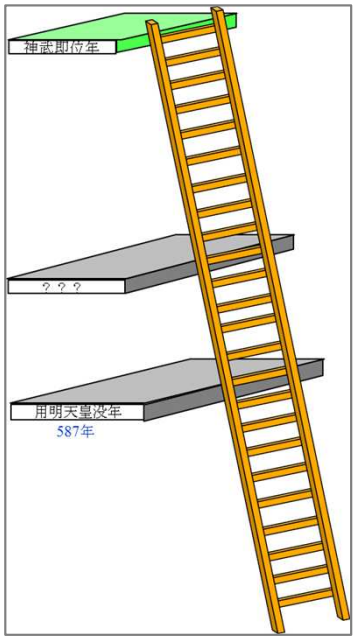
- 右の図は、
  - 初代神武から現天皇までの即位年をリストし、グラフ化したもの。（日本書紀ベース）
  - 馬場範明さんが作成した図に、丸地が近似直線と注記をしたもの。
- このグラフを見ると不自然な変化がある。
  - 100代から17代履中天皇までは直線上に並んでいる
  - 履中天皇から神武天皇までは、別の直線上に並んでいる。
    - 極端に1世代が長くなっている。
- 17代履中天皇以前の年代は、意図的に引き延ばされていると推測される。
    - これ以前の年代は、粉飾され、信用してはいけないことが、明らか。



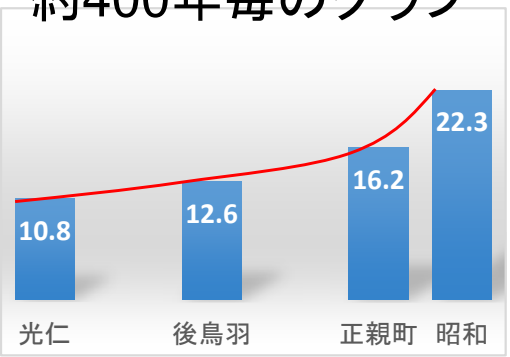
神武即位の年代推定：安本美典氏の方法論

- 古代の天皇が、実際に活躍していた年代を知るには、
  - 存在が確実な天皇から出発して、一代10年、一代10年と、
    天皇の系譜をもとに、「代による梯子」を古代へむけて登って行けばよい。
- 外に適切な手法が見出せない中、
  この手法は、有力な解法と云える。
- 海外の古代王朝の例を引き、400年毎のグラフを示し、在位年代の漸減を説き、一代10年の正統性を説明し、初代天皇の即位年を推定し、277年とした。
- しかし、確認のため、約200年毎のグラフを作成してみると、妙なことが起き、今度は10代単位でグラフを作成すると、漸減では無い結果が現れた。
- 一代10年では無く、一代11年強との解が出た。

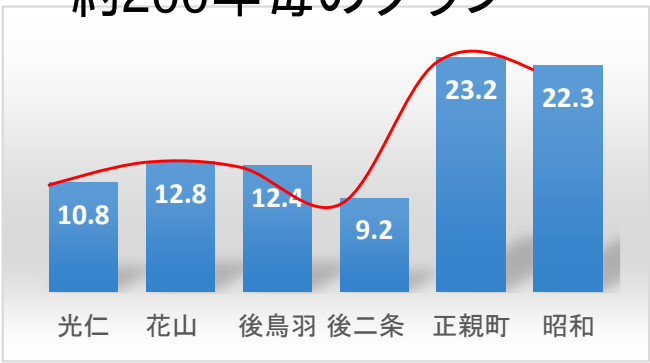




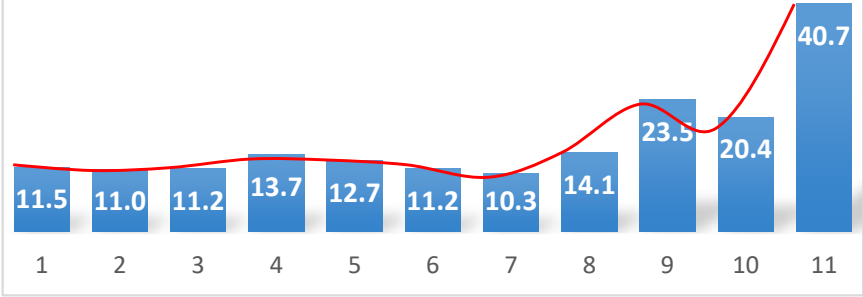
約400年毎のグラフ



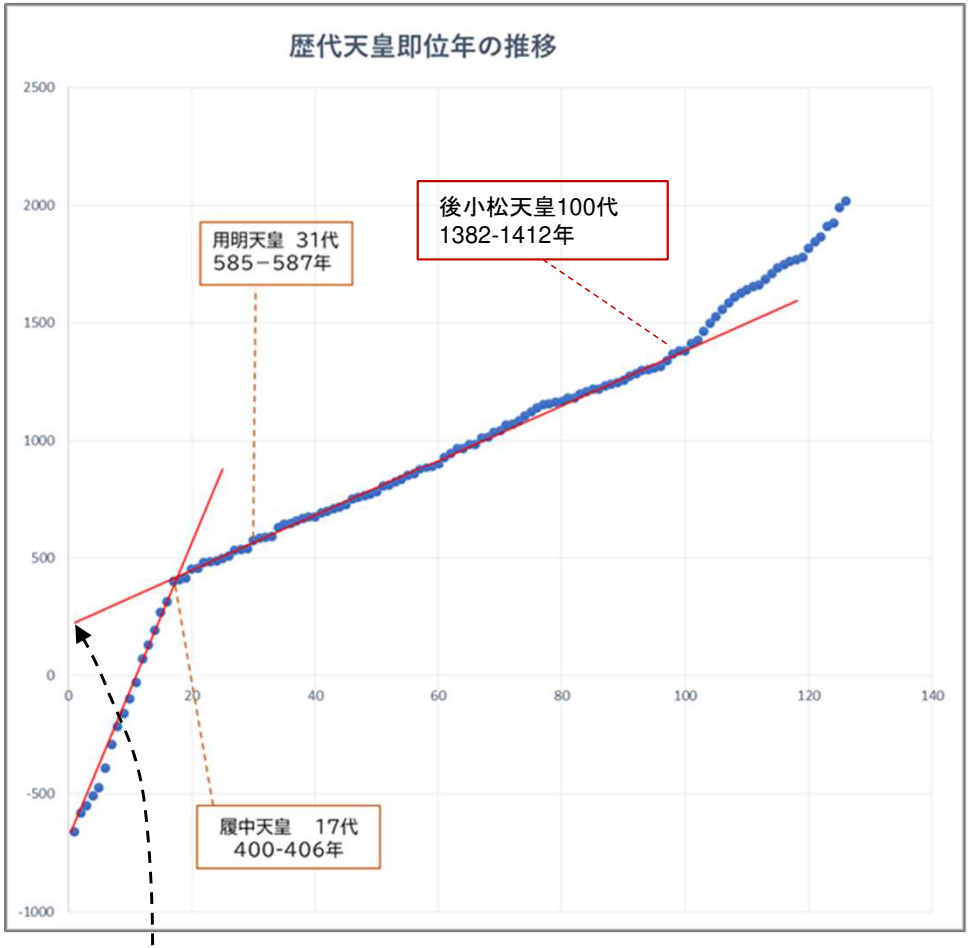
約200年毎のグラフ



10代毎のグラフ



歴代天皇即位年代からの初代の推定



初代・神武天皇即位年
推定239年

- 外に適切な手法が見出せない中、この手法は、有力な解法と云える。

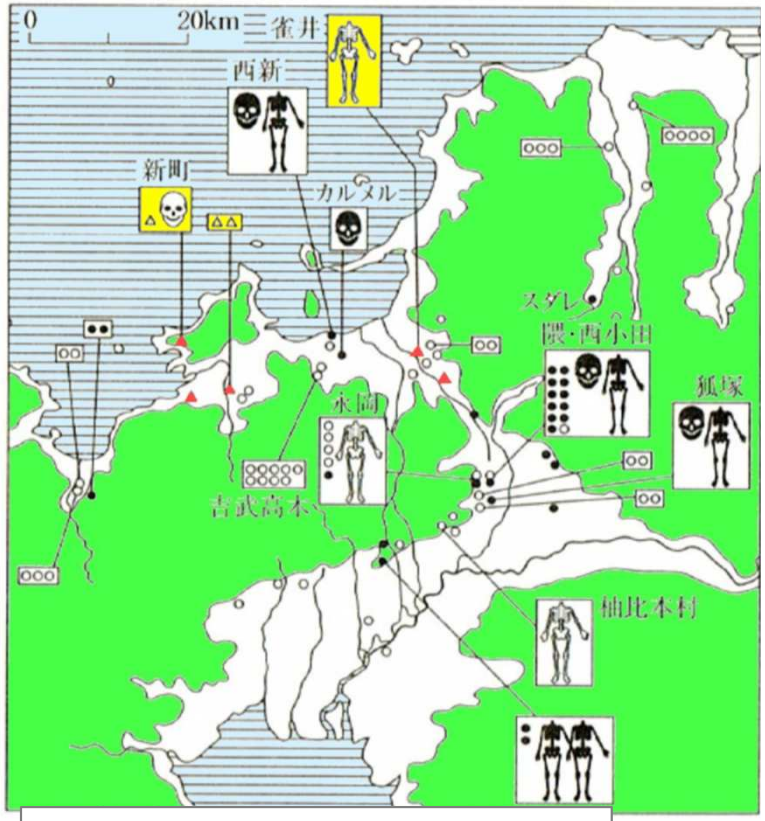
- 直線補間した場合の初代天皇の即位年を推定する。
  - 即位年の確証が高い用明天皇の即位年を採用
  - 用明天皇31代即位585年
  - 後小松天皇100代即位1382年
    - (1382-585)/(100-31)=11.5
    - Y = 11.5 × X + 227
      (即位年) (代数)
    - 239年 =11.5×1 +227
  - 初代(1代)の神武即位年を239年と推定する

- 外に適切な手法が無いことからの推測で、年代の目安となるもので、前後10数年の誤差は有り得ると見る。

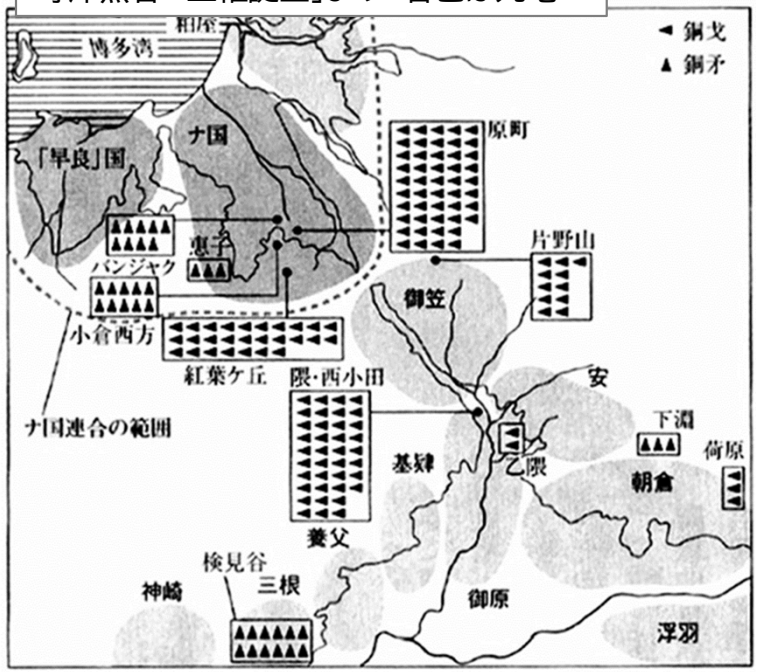
- 統計や計算を使う場合には、統計や数学の基本に沿って行うことが求められる。
  - 統計では、条件をいじると、思うような結果を得られるが、歴史の目的に有った条件設定が望まれる。

戦傷遺跡と埋納の解釈

- 戦傷者が遺された**戦争遺跡の評価**
  - **考古学者は、敗者と判断、多い村は「負け組の村」と評価。**
  - 評価の仕方に疑問！
    - 酸性土壌の日本では、戦場に放置された敗者は、残らない。
    - 残るのは、甕棺・支石墓などに埋葬された場合。
    - 例外的に、貝等石灰質の多い土壌・砂浜では放置されても残るその例は、山口県土井が浜遺跡。
  - 支石墓・甕棺に残された戦傷遺骨は、**勝者の側の負傷者・死者と見るべき（仲間を連れ帰り埋葬）。**
- **埋納の理由・目的**
  - 人里離れた処に埋納する目的と理由は、多様なもの。
    - 納得の行く理由・目的は無い。
  - ➢ そこで、以下の理由・目的を推奨する。
  - 勝利者側が、敗者の持っていた武器・祭祀器を、取り上げ、勝利の印としての故郷又は所縁の地に持ち帰り、二度と使えないように人目に付かない処へ埋めたもの。場合によっては、持ち帰らず、山中に埋めた。
  - 又、遠い離れた場所に居る敗者の一族が持つ武器・祭祀器は、敗北の印として、敗者の手で、山中に埋めさせた。
    - 日本書紀に語られた、大国主命が差し出した矛が、天孫族の手で埋納されたものが、加茂岩倉遺跡・荒神谷遺跡。
  - 埋納の時期は、出雲の国譲りに関わる戦いの時期
    - 青銅器の作られた時期に関わらず、庄内式土器が出土。



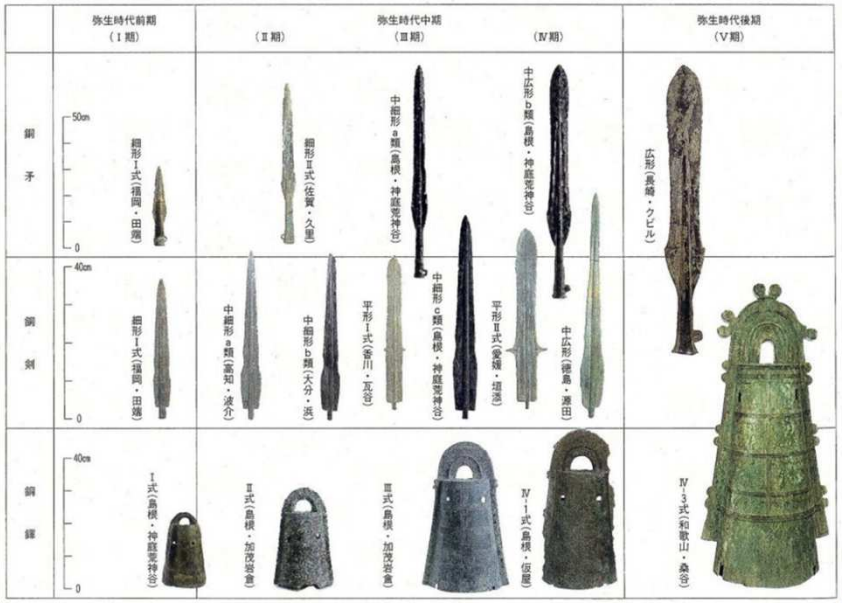
寺澤薫著「王権誕生」より　着色は丸地



ナ国と周辺のクニグニの呪禁

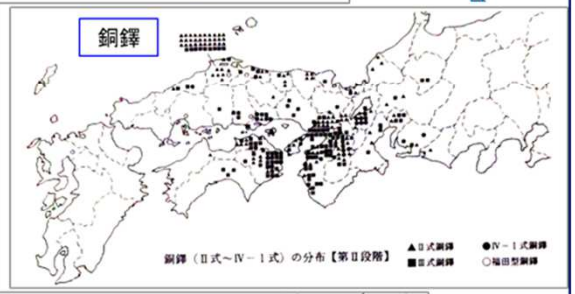
銅鐸・青銅製武器型祭器

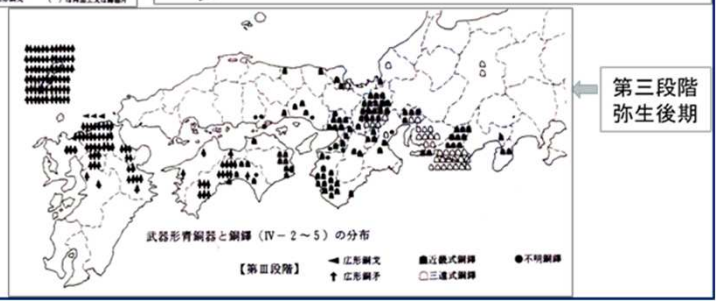
表１－５　銅矛・銅剣・銅鐸の移り変わり
参照文献：『古代出雲文化展　神々の国悠久の遺産』　島根県教育委員会・朝日新聞社　1997



調査報告電子版　2012年12月20日掲載　2015年11月4日増補改訂
イワクラ（磐座）学会会報35号掲載　青銅器のデータ集より

埋納された青銅器の分布





出雲の考古学と『出雲の風土記』に収納
松本岩雄著　3章　「出雲の青銅器」より

原典は著者の下記の論文
松本岩雄「弥生青銅器の生産と流通―出雲地域出土青銅器を中心として―」 古代文化　第53巻第4号　2001年　より

- 銅鐸圏・銅矛圏と云われた文化圏は存在した。別個の文化圏と云われてきたが、加茂岩倉遺跡・荒神谷遺跡で、両方が大量に発掘されたことから、推定されることは、両方ともに出雲一族の祭祀用で、時代と地域により、分布が異なったもの。
- 祭器としての銅矛・銅剣の文化圏の中心は、出雲と北九州と見える。数量的には、その2か所が突出。
- 銅鐸文化圏の中心は出雲と畿内。
  - 畿内に有った銅鐸が出雲の国譲りの時に、敗戦・降伏の印として、出雲へ運ばれたと見る。運びきれなかった大量の銅鐸が出雲方の手で、畿内近辺に埋納されたものと見る。従って、畿内が銅鐸圏の中心地。
- 大国主命の大和に関する逸話
  - 古事記に嫉妬の激しい須勢理毘売命を嫌って、外へ移ろうする逸話が有る。結局は、ほだされて、出雲に残る歌が主役の話。興味深いのは、その移動予定地が「大和」と記されていること。
  - 神武東征後に正妃となる事代主の娘達も、大和の磯城郡の人と記される。そこは、三輪山の麓・大神神社に近い場所。

青銅器（武器・祭器・銅鐸）の製造者

銅鐸・武器型青銅の生産地域と副葬された青銅器

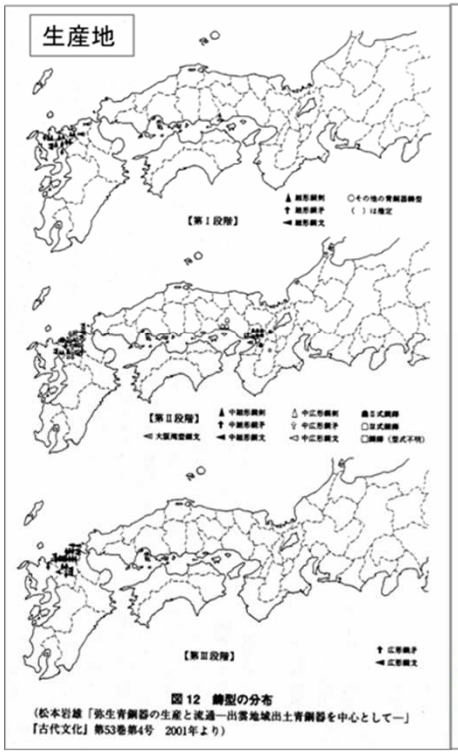


図12　鋳型の分布
（松本岩雄「弥生青銅器の生産と流通―出雲地域出土青銅器を中心として―」『古代文化』第53巻第4号　2001年より）

・左図は鋳型の分布、右図は副葬品として出土分布図

・鋳型は生産地を示す。
・第一段階と第三段階では、生産地は北九州に限定。
・第二段階では、北九州に加え、大阪を中心に滋賀、奈良及び北陸が生産地に加わった。

・北九州に限り、副葬品として墓に納められた。北九州以外は、墓に納めるには貴重過ぎたものと考えられる。

・出雲族は、北九州から青銅器の供給を受けていたが、第二段階では、自分達の手で生産を行った。

・それだけ大切な品物を、土中に埋めたのは、特別な事情があったことと、意味する。

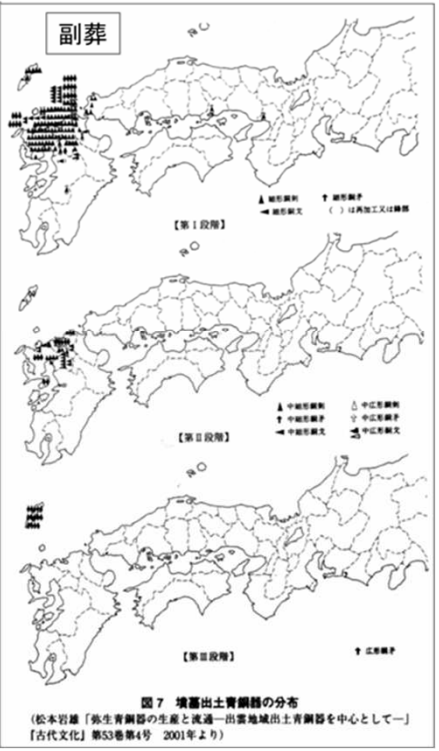


図7　墳墓出土青銅器の分布
（松本岩雄「弥生青銅器の生産と流通―出雲地域出土青銅器を中心として―」『古代文化』第53巻第4号　2001年より）

- 実践的な細型の銅剣・銅矛などは、北九州の墳墓から副葬品として出土する。
- 三種の神器（勾玉・鏡・剣）が出土する天孫族の王墓などから細型銅剣・銅矛が多いことから、細型銅剣・矛の副葬された墳墓は天孫系と見られる。
- 生産地は、鋳型の発見される地域で、
  - 前期には、北九州博多平野などに集中する。
  - 中期には、瀬戸内海沿岸・大阪にも拡散
  - 末期は、型が石型から砂型へ技術が変わり、遺物として残存しないことが多く、出土例が減少したが、生産地は、畿内・中京地区へ広がった模様。
- 前中記では、須玖岡本の周辺で大量に生産
  - 出雲族の祭器が、天孫族の中枢地域で作られたことは、不思議。
    - もし、そうだとすると、対価は何であったのか、疑問となる処。
  - 末期には、北九州でも生産されたが、瀬戸内・畿内にも広がった模様。しかし、生産量は格段に減少したもよう。

翡翠（ヒスイ）と勾玉の加工技術

- ヒスイ原石は、日本海岸の糸魚川市で産出。
  - 日本の複数の地域でも産出するが、装飾品としての価値のあるヒスイ原石は糸魚川産のみ。
- 古代中国でも硬玉と云われ珍重されたが、その産地も糸魚川。
  - 昭和時代に入るまで、糸魚川産であることが忘れ去られ、その供給地は、ミャンマーとか、朝鮮半島と云われたが、誤りだった。　　現在、世界へのヒスイ供給は、主にミャンマー。
- ヒスイの硬度は、モース硬度: 6.5 – 7　極めて加工が難しい。
  - 日本では、**縄文時代から**ヒスイに穴を開け、飾りものとして使われ、日本各地から出土する。
    - 加工方法は、ボール盤のように、棒状のものを、垂直に下ろしながら、回転させる。ヒスイとの接触面には、砥石を含む液体を流し、研磨することで穴を開ける。
    - 加工が長時間に渡り、その間、垂直性と回転を保つことは現在の工作機械の精度レベルが要求される。
- 管玉も、石の丸棒を作り、2mmの直系の面に1mmの穴を丸棒の長さ分垂直に加工する。
  - この加工技術は、ヒスイ穴明け加工技術と同じもの。
    - 現在の考古学では　技術器具は不明。

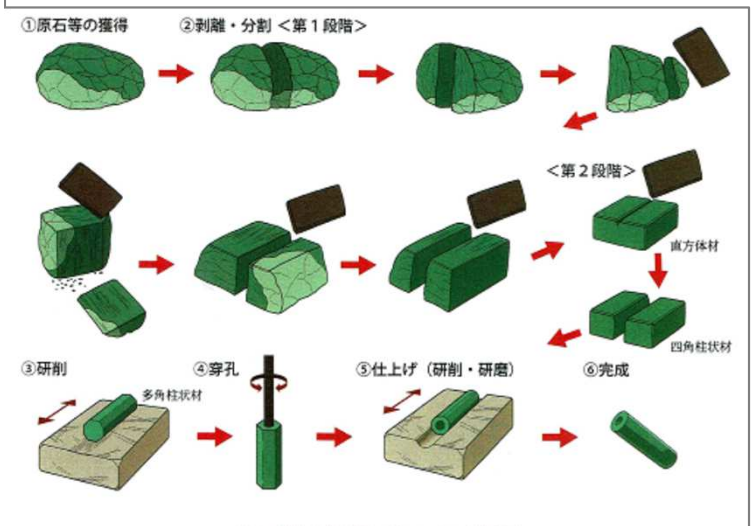


図7　青谷上寺地遺跡の管玉つくり（模式図）

茅野市尖石縄文考古館　展示品

ヒスイ勾玉・管玉の生産・流通

- 2013年鳥取県埋蔵文化センター「日本海を行き交う弥生の宝石」～青谷上寺地遺跡の交流を探る　の資料を基本に記す。
- ヒスイ原石の産地は、一ヵ所で糸魚川。
  - 奴奈川姫を手に入れ、大国主命は、加工工場を近隣の上越市、石川県に開き、生産を拡大したものと見られる。
- 管玉の原石は、各地にあり、日本海側各地に管玉の加工工場を開き、生産を高めた。
- 勾玉・管玉を集め、青谷上寺地などで装飾品として仕上げ、最終消費地である北九州へ送る壮大な交易ルートが構築されていたことが判る。

消費地の動向　（熊本大学文学部　木下尚子著「九州弥生人の勾玉・管玉と北陸」－ヒスイ素材の流通をさぐる－より）

北部九州の4遺跡の管玉と勾玉の消費状況からわかることをまとめると、以下のようになる。

① 管玉とヒスイ勾玉の使用は、弥生時代前期末～中期初頭に、青銅製品使用と軌を同じくして福岡の有力者層間で始まり、やや遅れて唐津と宗像でも使用が始まった。

② 北陸産石材を使った管玉は、弥生中期前葉に北部九州に登場した。

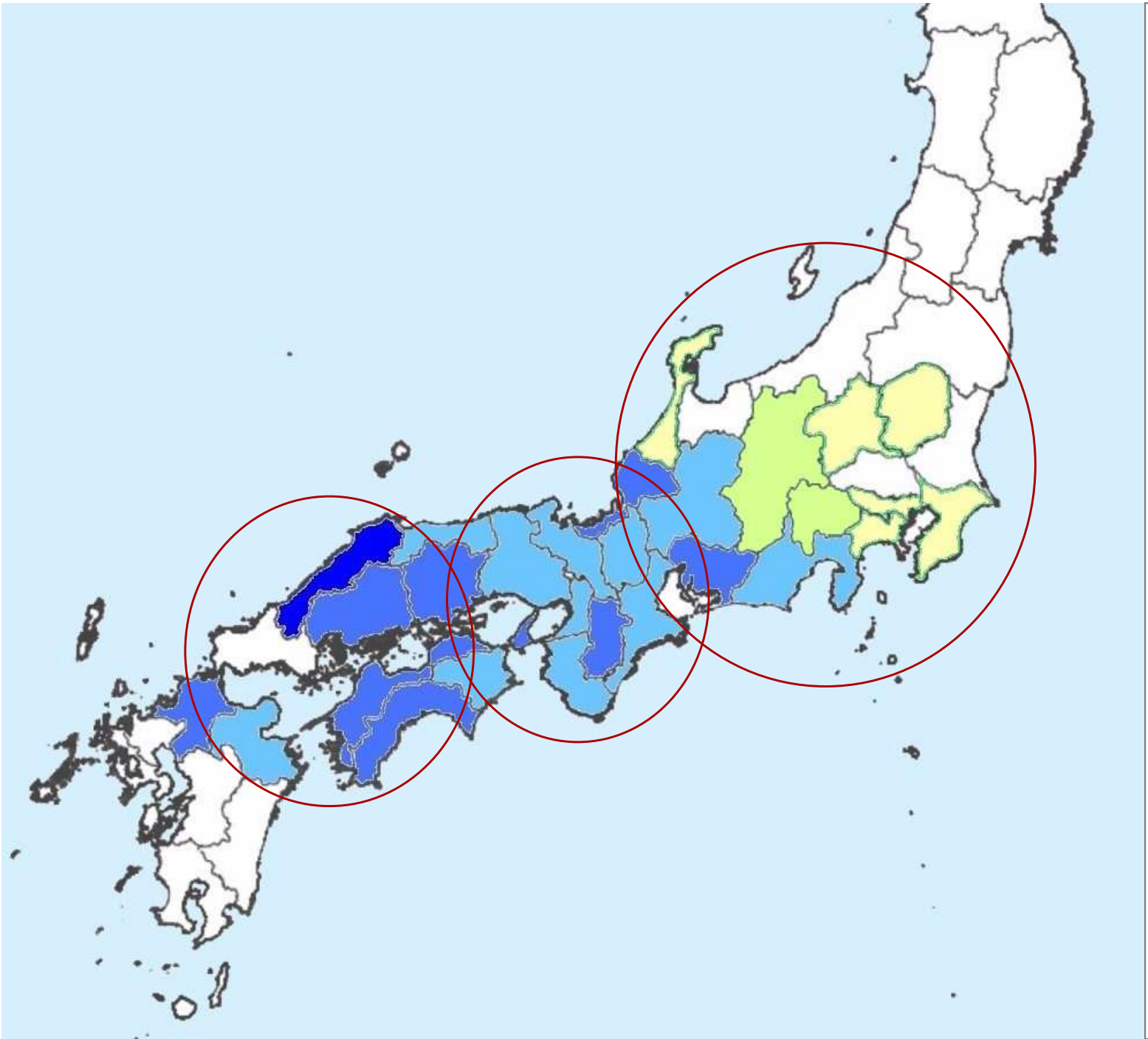
③ 管玉の加工地は大半が鳥取西部以西だが、弥生中期前葉には北陸・近畿北部で加工された管玉が宗像地域に入ってきている。

管玉とヒスイ勾玉を欲したのは、北部九州の権力者層であった。

ヒスイ原産地

図15　弥生時代中期中葉～後葉の玉の流れ

出雲族の拡大範囲 ① ：埋納・青銅器と小銅鐸の分布から読み取る



・ 小銅鐸には、土器のタイプのものもあるが、今回は加えていない。

・ 埋蔵された青銅器と小銅鐸の分布を加味すると、次のような領地拡大の様子が覗える。

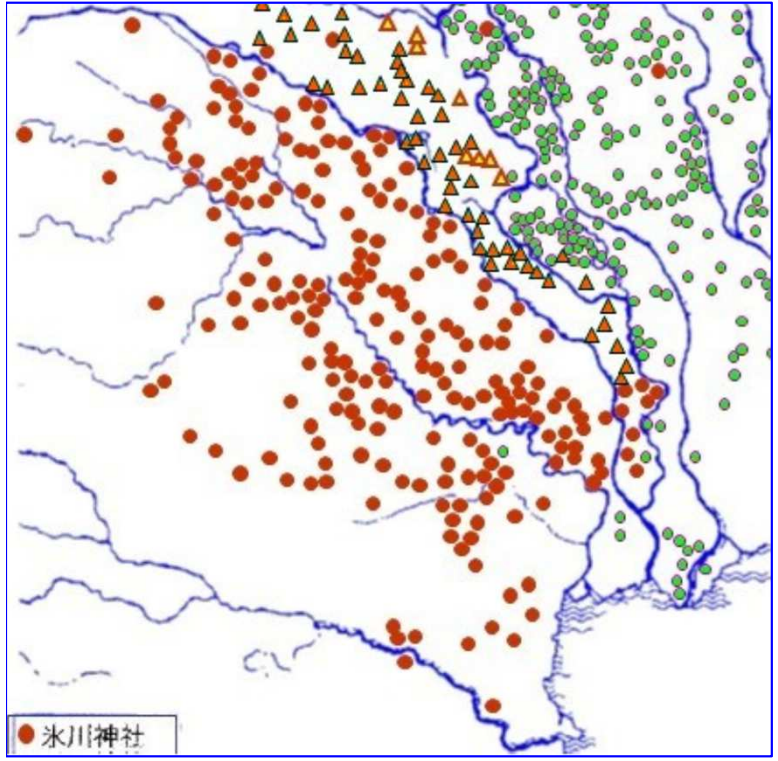
1. 四国・中国へ。 北陸・大和・愛知の拠点を確保
2. その周辺への拡大
3. 日本海側から長野・山梨・関東へ。 又は、
   太平洋側を愛知から静岡・神奈川・千葉・東京へ

・ 全体的に見ると、地域グループが見えてくる。

A） 出雲・安芸・愛媛・高知

B） 近畿

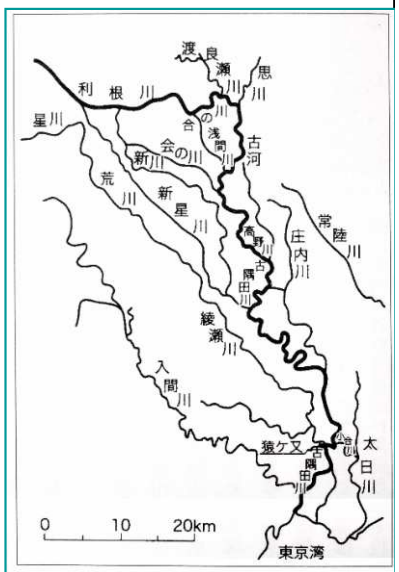
C） 北陸・中部・甲信越・関東



氷川神社

- 氷川神社の御祭神は
  - 須佐之男命（すさのおのみこと）
  - 稲田姫命（いなだひめのみこと）←須佐之男命の妻
  - 大己貴命（おおなむちのみこと）：大国主命
- 大国主命が、武蔵国を制圧し、3つの氏族の人々を引き連れて入植し、開拓したものと推察する。最大グループは氷川神社を祭り、その外の2グループは、久伊豆神社、鷲神社を祭った。

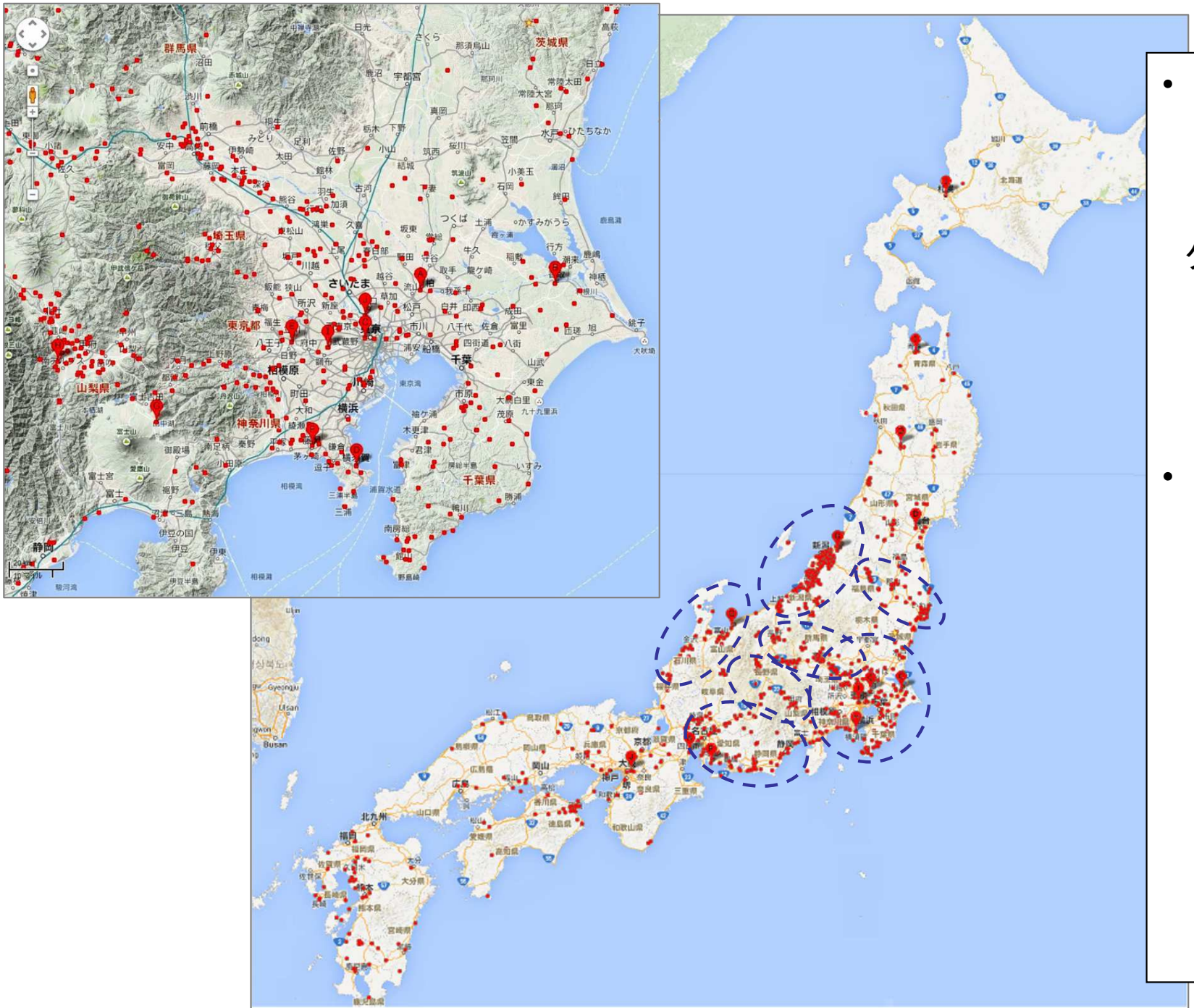
- 主祭神
  - 氷川神社　：大国主命
  - 久伊豆神社：大国主命・天穂日命
  - 鷲宮神社：大国主命（大己貴命）・天穂日命
  - 旧利根川の東側に存在する香取神社は、後の時代、神武東征時に、茨城の香取大社付近に上陸した経津主大神を祭神とする。



（図26）　古代の利根川

- 氷川神社は、武蔵の国（東京・埼玉）を中心に分布し、北陸にやや固まってあり、会津にも3社ある。
- 氷川神社を祭った氷族は、北陸、会津も開拓したものと推察。

諏訪神社（建御名方）の分布図



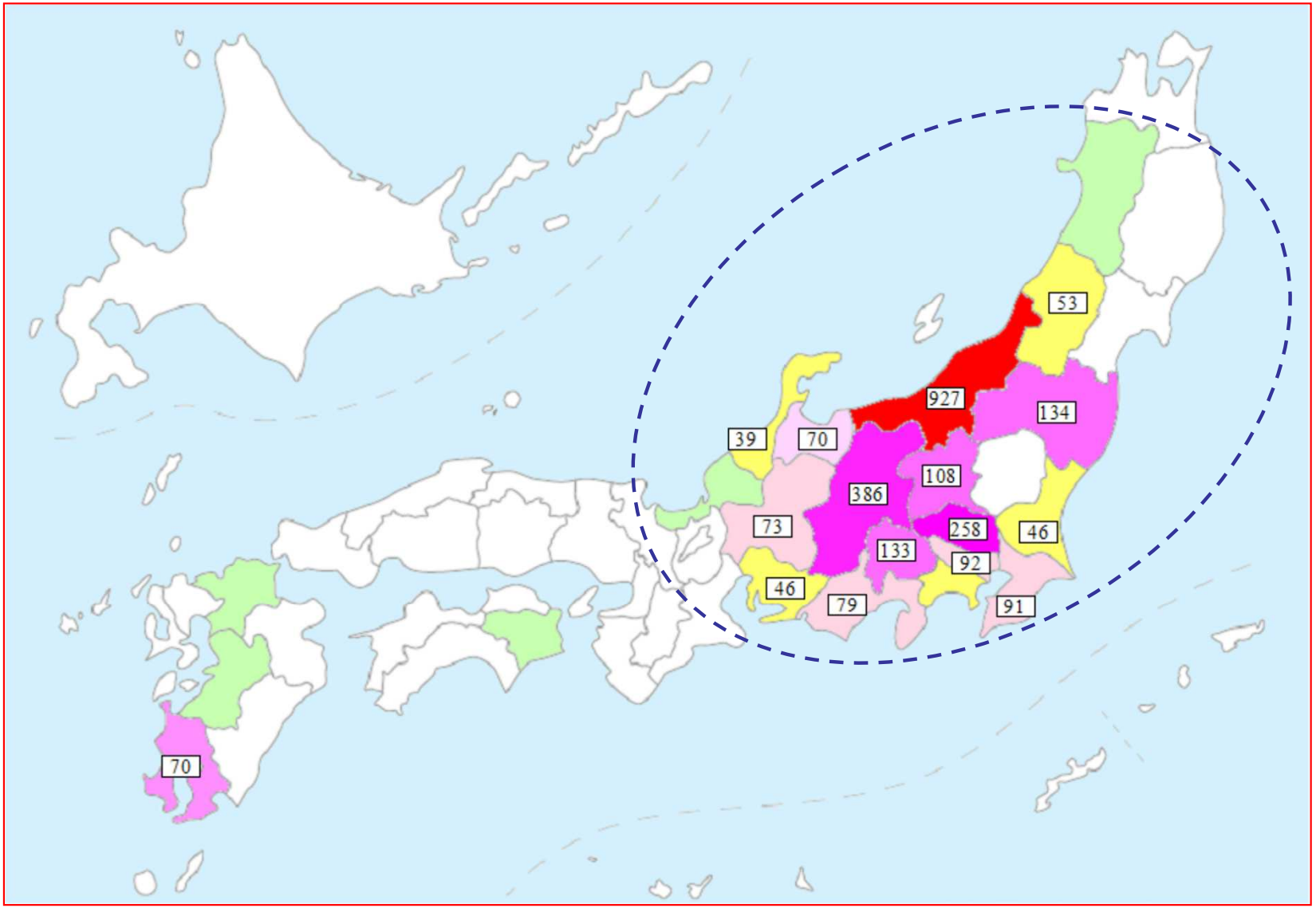
- 建御名方の支配した地域を示唆するものとして、諏訪神社の分布を示す。

グーグル地図の検索表示を利用
（位置と件数の凡その目安がつく）

- 諏訪神社は、後年、分社されている例が見られるので注意が必要。
  - 鹿児島県：島津藩の創始者が諏訪神社に帰依分社して移住
  - 長崎県：移住して分社。
  - 北海道：明治維新後の開拓者が分社。

諏訪・氷川両神社の分布

都道府県	諏訪神社	氷川神社	氷川+諏訪
北海道	2	1	3
青森県	8	－	8
岩手県	14	－	14
宮城県	18	－	18
秋田県	24	－	24
山形県	53	－	53
福島県	131	3	134
茨城県	44	2	46
栃木県	18	2	20
群馬県	108	－	108
埼玉県	96	162	258
千葉県	90	1	91
東京都	33	59	92
神奈川県	56	2	58
新潟県	927	－	927
富山県	70	－	70
石川県	39	－	39
福井県	16	14	30
山梨県	131	2	133
長野県	386	－	386
岐阜県	73	－	73
静岡県	79	－	79
愛知県	46	－	46
三重県	7	－	7
滋賀県	7	－	7
京都府	5	－	5
大阪府	4	－	4
兵庫県	20	－	20
奈良県	1	－	1
和歌山県	7	－	7
鳥取県	7	－	7
島根県	15	2	17
岡山県	19	－	19
広島県	9	－	9
山口県	3	－	3
徳島県	25	－	25
香川県	4	－	4
愛媛県	7	－	7
高知県	7	－	7
福岡県	24	－	24
佐賀県	10	－	10
長崎県	6	1	7
熊本県	31	－	31
大分県	9	－	9
宮崎県	15	－	15
鹿児島県	70	－	70
沖縄県	0	－	0
全　国	2774	251	3025



・　九州の諏訪神社は戦国時代以降のもので今回は、検討から除外

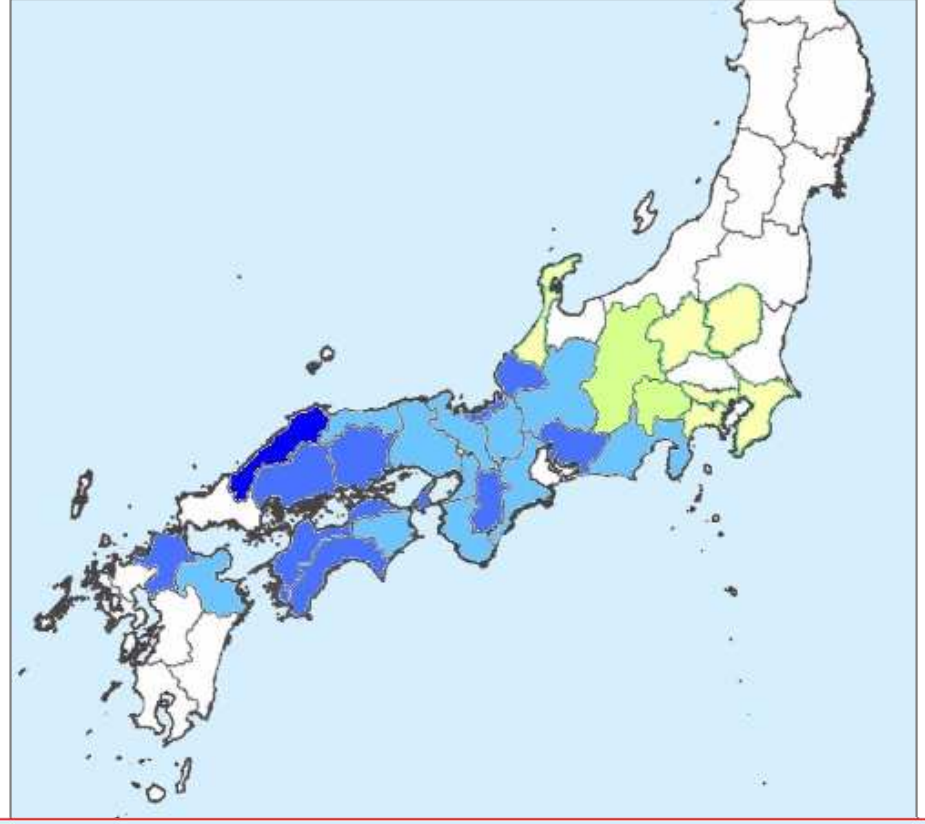
・　鹿島・香取地域は、天孫族の神社が並び天孫族が出雲国譲り後に、侵攻したもの。

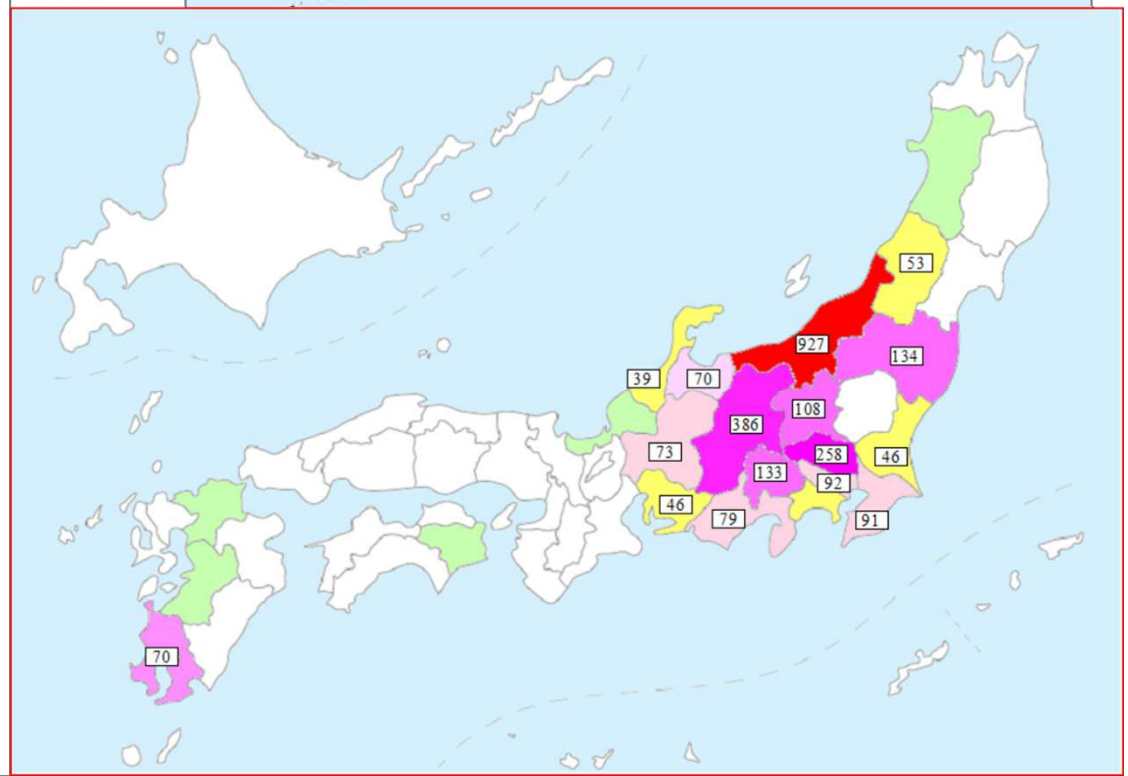
建御名方の統治・支配領域

空白の栃木県は、味耜高彦根神を祭る神社多数で出雲系の地域

出雲族の勢力範囲
青銅器埋納と神社の祭神の分布図から

- 青銅器埋納の分布図と神社の祭神の分布図は、その両方で、出雲族の支配地を表している。
- 青銅の武器祭器と銅鐸の分布は、支配地の拡大状況とその結果を示し、更に、氷川神社等・諏訪神社の分布は、その支配地域の拡大を示している。
  - 氷川・諏訪の両神社のすっぽりと抜けた栃木県は、なんと、味耜高彦根神を祭神とする神社のある地域。
  - 味耜高彦根神の行動範囲は、東北から、岐阜の藍見の喪山の神社に祭られる。
  - その後に本拠地（母親の故郷は宗像）に戻り、大乱で戦い、死亡したと考える。
    - 子孫は残っていない。
- 出雲族の支配地を、東北まで広げると、拡大のし過ぎとの批判が出そうだが、
  - 高地性集落の分布・北陸の天王山式土器の分布・アメリカ式石鏃の分布などの遺跡・遺物で確認できる。





高地性集落

- 高地性集落は、一時的に構築されたもの、「十数年に渡り」使用されたもの、「数百年単位」で使用されたものが有る。
  - 「数百年単位」: 瀬戸内海の航路を見渡せる場所などに構築されたものは長く使われ、航路の安全確保などにも使われ、戦時には、砦の役割を果たしたと推定
  - 「十数年に渡り」: 長期戦争(抗争)状態に有り、住民避難と戦時の城塞の役を果たしたもの
  - 「一時的」: 将に戦争で攻められるときに一時的に構築
- 弥生時代後期から古墳時代初期又は、第二次高地性集落は、出雲の国譲りと神武東征に関わる地域に構築
  - 寺沢薫氏の図は、愛知・静岡西部に多くの高地性集落を示している。
- 弥生時代中期後半から後期初頭の高地性集落は、出雲一族が勢力を全国へ拡大する時代に構築したものと推定する。

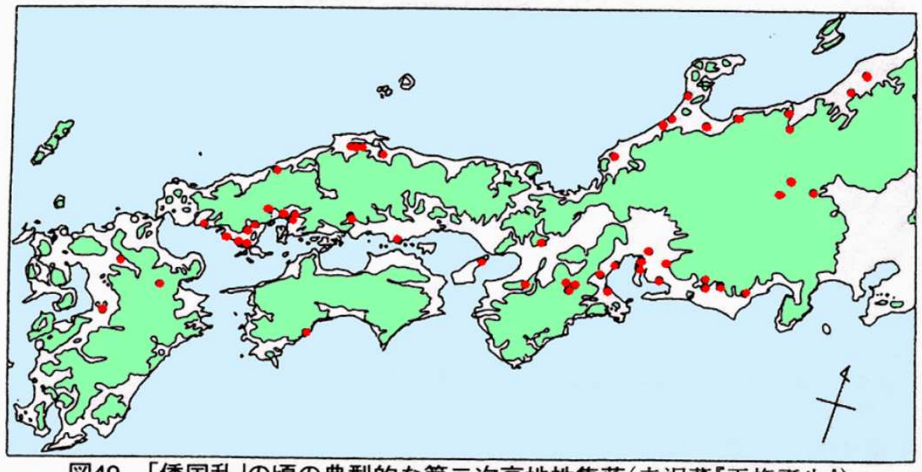


図49 「倭国乱」の頃の典型的な第二次高地性集落(寺沢薫『王権誕生』)

若林邦彦著「観音寺山遺跡」より

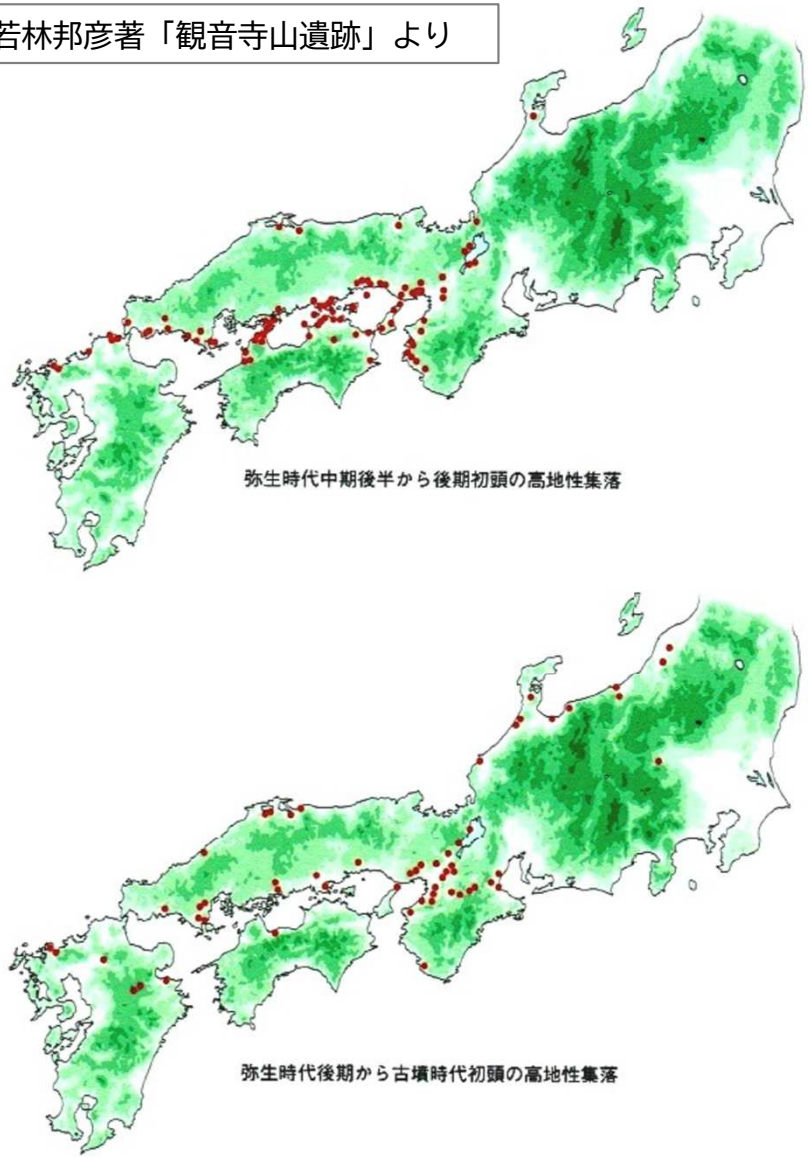
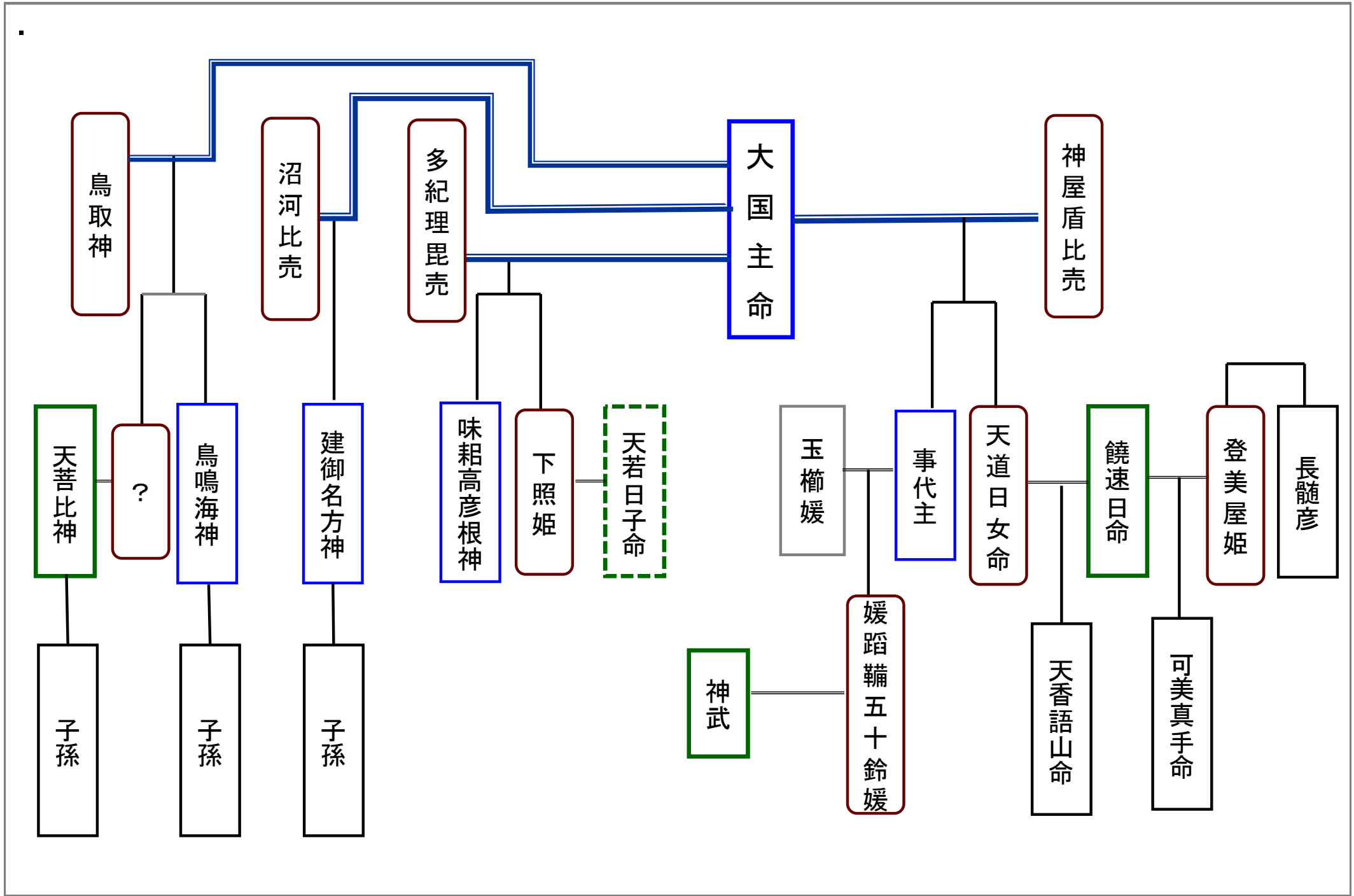


図 13 ● 高地性集落の分布の変化
弥生中期と後期では、高地性集落の分布は異なる。
後者はより広く分布している。

30

出雲一族の主役達：大国主命 と 息子／婿たち

丸地推定：古事記・日本書紀・海部氏系図などより



弥生時代の俯瞰図

丸地試作⑥　2021・02

絶対年代	中国史書上の日本関連	日本全体
473BC年	呉の滅亡（春秋）	
300BC年		九州の菜畑曲田板付で水田耕作開始
219BC年	徐福船団出航	支石墓が唐津糸島半島など北九州に広まる
212BC年	徐福第二次船団出航	日本全土（青森を含む）に水田耕作始まる
100BC年		山口県土井ヶ浜　望郷の戦争遺跡
紀元元年	後漢光武帝金印を賜う	戦争遺跡　支石墓に甕棺埋葬
57年		別天つ神/神代七代
107年	倭国の帥升が後漢に朝献	天照と須佐之男命　誓約
200年	倭国乱	須佐之男命　高天原で狼藉
240年	卑弥呼に送る魏が使者を	天岩戸　神話
248年	卑弥呼死去	須佐之男命追放
266年	使いを送る女王　晋に	須佐之男命と子孫5代
		須玖岡本王墓
		天孫降臨
		海幸彦山幸彦天孫族神話
		糸島・前原に天孫族の中心が移動
		福岡平野の繁栄は消滅出雲族の支配地に
		北九州の大戦乱
		出雲の国譲り
		神武東征
		天菩比神出雲収納
		大国主神話
		出雲・大和に銅鐸文化圏
		二極支配出雲・大和
		饒速日命大和支配
		事代主の隠居所三輪山麓
		大和朝廷成立
		手研耳命の乱　出雲・物部繁栄の時代

日本全体	九州等	出雲	畿内
米品種	初期　短粒米	「短粒米」が消滅し、「やや長粒米」が北九州を含む全土に拡散	
高地性集落		高地性集落遺跡　1期	高地性集落遺跡2期
青銅器		青銅器埋納	
戦争遺跡	戦争遺跡　1期	戦争遺跡　2期	戦争遺跡　3期
神器		三種の神器の墳墓へ副葬	

次回以降の委員会の進め方について

- 「弥生時代から古墳時代」についての委員会の話の進め方
  - 基本レポートで立ち入らなかった大和朝廷成立から古墳時代までを、どなたかに整理してレポートして頂く。
  - 具体的な項目を選び、それについて、二人の方にレポートをして頂き、議論を深めて行く。
    - 項目案
      1. 弥生渡来人　水田稲作の普及　　どんな社会制度文化を持参
      2. 北九州に成立した王権　　－　漢倭奴王
      3. 天孫族と出雲族の対立
      4. 天孫降臨
      5. 出雲の国譲り
      6. 神武東征・大和朝廷成立
      7. 天皇の全国支配確立
    - 出雲族について、良く調べた方が居たら、教えて欲しい。
    - 神武東征　あったのか？無かったのか？　注目を浴びる処で、多くの方が興味のある処から始めては？
      - 次回の「弥生時代から古墳時代」は、2021年8月以降の予定
- 次回以降のスケジュール・体制
  - 邪馬台国論（2021年3月27日）東京
  - 科学的年代測定法とその適用（2021年4月24日）東京
    - 3月の「邪馬台国論」について
      - 邪馬台国論の進め方について、基本レポートを丸地が行います。
        - 個々の論議に入ると、江戸時代から続いている議論が継続する恐れがあるため
        - 解明の方針について、議論を行いたい。
    - 4月の科学的年代測定法とその適用について、
      - 基本レポートを鷲崎会長に依頼したい。
- 3月の解明委員会で、全体の見直しを行う。
  - 体制　（現状：すべてのテーマに対して月1回）　→　分科会を作り、個々にスケジュールを決める
  - 日本書紀・古事記・風土記の世界（2021年5月22日）　・　大陸との交流（2021年6月26日）東京について見直す。
    - この2テーマは、日本人の起源/弥生時代から古墳時代/邪馬台国論の中で、特に留意すべき視点で、個別・具体的なテーマに入った方が良いとの考え方もある。